

コロンバス市花博・日本出展庭園における コラボレーションの記録

—アメリカ合衆国オハイオ州—

大塚 守康・壺井 勘也

1992年アメリカ合衆国オハイオ州の州都コロンバス市において、市名の由来するコロンブス新大陸発見500年を記念した園芸国際博覧会、アメリフローラ'92が開催された。それに対し、日本からは大阪府、大阪市、大阪市21世紀協会の共同体によって日本庭園が出展された。そこにおいて、大阪芸術大学環境計画学科の大塚非常勤講師がコーディネーターを務め、清水教授、壺井講師の参加を得て、無事庭園の完成をみることになった。これはその時のコラボレーションの報告である。尚、清水をはじめとする三者はともにEXPO'90花の万博において、それぞれの立場による役割りを担ってきた博覧会経験者である。

アメリフローラ'92は1992年4月から10月まで、コロンバス市のフランクリンパークを会場に開催された。フランクリンパークは市の中心近くにあり、緑豊かな36ha程の美しい公園である。しかし、周辺住宅地の悪化に伴い、風紀上好ましくない環境となり、博覧会はその状態を改善する再整備をも兼ねていた。日本出展の庭園はもとより、短期間で完成させなければならない会場整備にとって、豊かに繁った大木の存在は大変有効であった。往々にして、博覧会の仕事は時間との勝負となる。アメリフローラ'92の場合も企画設計のスタートは前年の秋口からであり、開催まで半年を切る情態にあった。出展案内はかなり前からあったが、日本からの出展主体の決定に長時間を要した結果、準備期間が短くなってしまった。すでにEXPO'90花の万博時にコロンバス市は日本の出展を期待して、独自の庭園を出展していたが、その後、出展主体が府・市・協会の合同へと決まり予算化される

までに長時間を要したわけである。開催まで半年の期間で、それも外国においてどの程度の仕事が可能であるかは、当初見当もつかなかった。さらに、コロンバス市の冬期は北海道の中央部と同じような気候であり、クリスマスを過ぎると3月までは土を掘ることも不可能と報告されていた。

このような状況下で出展企画の第一条件となったのは、一般に日本庭園の大きな作庭要素とされる水景の使用を一切諦めることであった。それは設備的調整を計る時間がないことと、厳冬期にまで及ぶ土工事が不可能であったからである。そこで、日本庭園の一方の手法である枯山水を基本としつつ良いキーワードが発案された。コロンブスが新大陸を発見した500年前は日本では桃山時代にあり、枯山水はその時期に完成された庭園様式である。また、桃山文化は日本美術の流れにおいても特に絢爛としており、博覧会へのなじみも良いように思われた。そこで、出展庭園のテーマは“桃山”となった。

さっそく、乱暴な話しではあるが現地から送られた資料をたよりに原案が企画された。敷地はなだらかな芝生の斜面に囲まれた窪地であり、数本の大木が生え、博覧会場の周遊道路に面していた。全体に西欧風の、のびやかで広がりのあるランドスケープであると想像された。企画に携わった大塚が日頃庭園よりも公共造園を専門としていることもあって、日本庭園の常套である内部完結型の空間は発想されなかった。のびやかで区切りのない敷地に垣をめぐらさず、局部的に日本庭園の要素を組み入れることで全体を日本庭園化することが目指された。

周囲の斜面や立木はそのままに、窪地を浅く掘り込ん



で池とし、残土を会場内の園路側に盛って築山をつくった。枯山水の滝組はその築山に庭園から外を向いて作り、そこからの流れを外周から中の池へと引き廻した。園内に入らなければ見られない日本庭園ではなく、外周園路からすぐに中心的装置が見られ、中ではまた違った空間が展開するといった構成である。内部の池に臨む主要施設として“桃山”のキーワードから当初能舞台が考えられた。しかし、あまりに求心的で空間に動きがなく、また工費や工期の問題からも再考されることとなった。それに代わって、大海を渡る長大な太鼓橋にあらためられた。橋の頂上付近には物見台を兼ねて、橋舞台を添えた。これによって園内を廻遊する動線ができ、観覧者の視線がダイナミックに変化することを期待した。周囲に垣を設けない庭園であるためにゲート部分の印象が薄いことが心配され、何かインパクトのある象徴性が必要になった。その後、この部分に壺井の桃山燈籠が設置されることとなる。原案作成後すぐに現地に飛び現場との照合を図ったが、幸い基本的な問題もなく、すぐに現地の

博覧会担当スタッフと具体的な話しを進めることができた。

最近、ものづくりの世界が個人の領域を越えて複数のアーティストやエンジニアのコラボレーションによって行われることが多くなった。それが博覧会の仕事では特に顕著である。基本構想はあくまで基盤となるアイデアであって、それをより豊かに具体化するためには多くのアーティストの優れた才能が必要である。そこで、大阪花の万博の経験を持つ本学の清水と、造形作家である壺井と、新進の建築家であり、伝統技法と現代感覚とを合わせもつ平口教明の参加を求めることとなった。もうひとり会場に華やいだ雰囲気を持ち込む旗飾りに、インスタレーションアーティストか服飾デザイナーの存在が求められたが、経費の点で諦めることとなった。

壺井は庭園のテーマである“挑山”をイメージして勇壮華麗な黄金の燈籠を作成した。高さ2.7m、傘の径1.8mもある雄大なもので、伝統的形態を基本としながらも、現代的造形美によって表現されたものである。庭園



会場内園路から見た現場の様子





開会当日の新聞



開会式に橋の渡り初めをする要人の方々



の入口部分に据えられた桃山燈籠は、博覧会場の主園路を通る観客の多くの目を引き、日本庭園の一部というより会場全体でのランドマークの役割をも果たしていた。庭園に入る前に、燈籠を背景に記念写真を撮る姿をよく見掛けた。

建築家の平口は長大な橋舞台を優美に軽やかに大海に渡してくれた。これも伝統的形態を彼の感覚で現代的に作品化したものである。彼の場合は州の建築安全基準の

問題もあり、現地のエンジニアと建設業者を使用していたので、アメリカ式工法の違いや仕上げの精度の違いに苦労されていた。しかし、これも国際博ならではの国際的コラボレーションであろう。水のない大海であれ、そのある長い橋を渡るというのは、視点の変化もありなんとも楽しいもので、多くの観客が喜んでいた。

庭園の施工は現地の建設業者を使いつつ、(社)日本造園建設業協会の大阪府支部が全面協力の体制で、非常に強力な人材を長期間現地に送り込んで行われた。日本庭園の具体化は、現場での施工によるところが大きいことが痛感された。ほとんど構成図と部分イメージ図しかない図面から、彼らはすべて現地の材料を選びすぎり、見事に日本庭園を仕立て上げてくれた。彼らと現地コンストラクタースタッフとのコミュニケーションにおいて、英語をほとんど必要としない国際感覚にも恐れいった。

このように多くの人々の協力によって出来上がった日

本庭園は幸い現地の人々に好評で、とりわけ在住の日本の方々には大変喜ばれ、博覧会後も存置される庭園の管理をかつて出てくれる人まであらわれた。壺井制作の黄金に輝く桃山燈籠は彼らのシンボルともなった。オープニングに先立って現場でテレビのインタビューを受けた大塚は、枯山水や桃山燈籠の意味や、橋舞台がコロバスと大阪の友好のシンボルであることを述べた。すると、開期中地元のボランティアのスタッフは、ほぼそのとおりの説明を来園者にしてくれていた。テレビで顔を覚えていた市民からは何度か握手を求められた。このあたりはコーディネーターの役得である。オープニングの当日、地元の朝刊にはなんと我々の庭園の太鼓橋から微笑む人気歌手の写真が大きく一面を飾っていた。

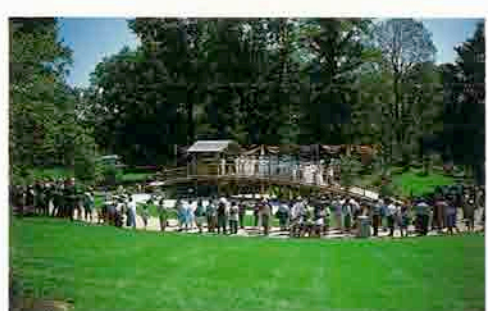
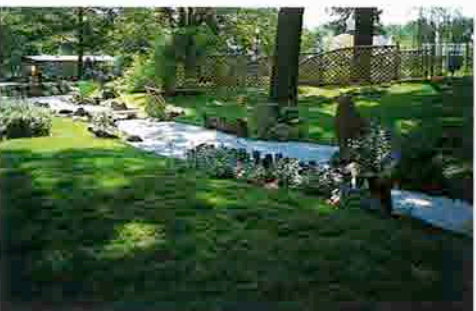
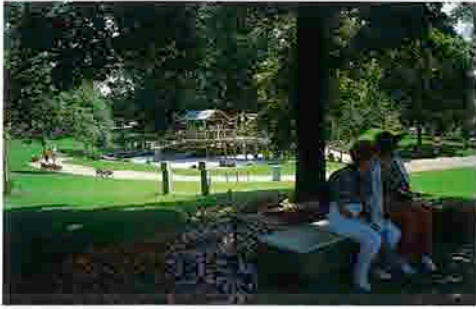
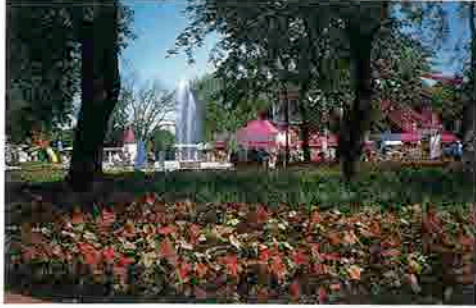
オープニングセレモニーは当時のブッシュ大統領夫妻も専用機で訪れ、華やかに開催された。日本側からは中山正輝衆議院議員、中川大阪府知事、西尾大阪市長等が参加され、橋舞台の渡り初めをした。博覧会での仕事



施工風景



日本で制作された桃山燈籠



はハード施設の整備だけでなく、期間中のソフトウェアにも関与できることが大変楽しい。特に外国での場合は構成スタッフが少人数であることから、予算の範囲内であれば色々な企画も我々が行うことができる。そこで、開会式のイベントとして大塚のプロデュースにより、ニューヨーク裏千家茶の湯センターから山田所長とお弟子さんの主催による野立てを行っていただいた。これは、

日本側の参列者のみならず、現地の要職の方々や観覧者等多くの人々を楽しませた。また、コロンバス周辺には日本企業が進出していることもあって、日本の女性の方々がけっこう多く暮らしており、彼女達の池の坊花道教室の協力を得ることもできた。そのお陰で、西欧庭園に比べて花の少ない庭園に、活花で華を添えることができた。彼女達も屋外の庭園に直接花を活けるという初めての経験を、とまどいながらも楽しんでくれた。これで、博覧会後も庭園に愛着を覚える方が少しでも増えてくれれば幸いである。開期中盤の8月には、夏休みを利用して海外ツアーに出た大阪市淀川高校のブラスバンドチームが、屋外コンサートのあと庭園の橋舞台で演奏し、来園者の喝采をあげた。彼等は吹奏楽日本一のチームであって、本場のアメリカへのなぐり込みツアーであった。

庭園作品は、一般的に個人の作品として認識されることが多い。しかし、多くの人々のコラボレーションによって作品化される例も最近とみに多くなる傾向にある。造園学会では作品選集の刊行を始め、会員の作品を紹介しているが、そのほとんどが数人の連名になっていることもこの状況を示している。特に大型の公共事業ともなれば個人の作品として限定することすら不可能になりつつある。博覧会の仕事ではそのことをむしろ率先するよう、できるだけ多くの、多分野の人々の参加を呼びかける姿勢をもつことが大変重要であるように思われる。今度の場合も、多くのアーティストの才能によって良い作品が残せた喜びもあるが、それを通してまた良い関係を広げられたことが何よりであった。